

学級経営のフレームワーク

国立大学法人上越教育大学教授 あかさか しんじ 赤坂 真二



1 アフター・コロナの学校

ある学校から校内研修のご依頼をいただきました。「先生方は日々がんばっているのですが、各クラスで子供同士のトラブルが多く、教育活動の運営が大変。」とのことでした。授業参観をしてみると賑やかさとあたたかな雰囲気の中で学習活動が展開されていました。離席をする子も先生に反抗的な子も見当たりませんでした。ただ、夜の会が設定されていましたが、出席予定だった方々の3分の1ほどが急遽キャンセルされました。理由は、保護者対応でした。こちらの学校では、春から断続的に保護者からの様々な訴えがあり、放課後はその対応に慌ただしいとのことでした。

次の週に訪れた学校は、かつては市内でも荒れていたことで知られている学校でした。研修の折に、先生方に「そろそろトラブルが起ってくる頃ですが、保護者対応が必要な事案はありましたか？」とお尋ねしてみると、「色々あるけどねえ」と眩きながらも「未だ0」とのことでした。こちらの学校は、数年前から児童の実態を考え校内研修の中心テーマに学級経営を据えて取り組んで来ました。人事異動などで、校内研修のテーマや焦点が変化していくことは公立学校の宿命とも言えますが、管理職はじめ異動して来られる先生方は、児童の実態をよくわかっていて、その時その時で、算数科、道徳科など授業づくりのテーマは変わりますが、学級経営を基盤にすることだけは変えませんでした。

2020年のコロナの第一波下でも、教育委員会と連絡を取り合い、児童同士の交流はどこまで可能かを検討し、協同学習や話し合い活動、ソーシャルスキルトレーニング（SST）などを実践し、児童同士のつながりを築くことを怠りませんでした。

みなさんの学校は、コロナ禍の前後で子供たちの様子、特につながりの視点で見ると何か変化があったでしょうか。ある小学校の教頭が次のような話をしてくれました。

「オンライン授業が普及したこの3年の間、受験対策ならYouTubeで有名講師がたくさん授業を配信しています。勤務校でもオンライン授業の実施がスムーズに行われたので、学習の遅れはほとんどありません。今でも出席停止の子は自宅で教室の映像を見ています。

しかし、コミュニケーション能力は危機的状況です。子供同士のトラブルの際、『あいつが先に死ねって言ったのに、なぜ自分は言っていないの？』、『言わないままじゃ負けじゃないか』といった発言は当たり前にかれます。それはこの学校の文化として『常識的考え』に思えるのです。

学校で荒れる子供に対し、教師は指導します。当然のこととしてそれを保護者に連絡します。親は親で、子供を叱りつけます。教師も親も、子供を怒りで抑えてきました。怒りが不信と更なる怒りをつくり出しています。

不信感でいっぱいの子供たちが防衛のために暴れたり、他者を傷つける言葉を言ったりしま



す。実際に暴力が毎日のように起きています。

校内のあらゆる箇所を施錠しないと子供の命を守れない状態です。安心・安全が守られていないのに、学習指導なんてやっても成果が上がらないのは当然だと思いますが、あろうことか先生方は根本原因が見えていないのです。子供をどうやって抑えるかばかり考えています。教師としての能力がないわけではなく、そういう価値観を教育されていないのです。先生方に悪気はありません。知らないだけなんです。

ただ、小学校でも教科担任制が入ってきている中で、これまでのように『学級経営』という伝え方がいいのか、私もどういった伝え方が職員にはまるのかを考えています。これから、どうなっていくのかなと不安です。」

コロナ禍が明ける年にこの学校に赴任した教頭は、勤務校の現状に愕然としたそうです。コロナ禍の間に、知らず知らずに子供と教師の関係、そして学校と保護者の関係は薄れ、職員室としてのまとまりも弱まってしまったというのです。

みなさんの勤務校はいかがでしょう。様々な制限はあったでしょうが、子供、保護者、教員の関係性を強^{した}かに紡いできていて、今、問題がないわけではありませんが、大きな問題はそれほど起こっていないという状態か、授業を止めず、教科指導の時数の確保に尽力した一方で、子供、保護者、教員同士の関係性の育成は希薄になっているか。単純には分類できないとは思いますが、コロナ禍の影響はいかがなものでしょうか。

2 学級担任の専門性

子供や保護者の多様性に伴うニーズの複雑化によって、学級担任の仕事はとても難しい

仕事になっています。しかし、力量形成の視点で見ると、学級担任を取り巻く諸事情はあまり変化していないように思われます。若い先生方からお話を伺うと次のような声が聞かれます。

「なぜ、うちのクラスばかり問題が起こるのかなあって思います。どうして、〇〇先生の言うことは聞くのに、私の言うことを聞かないの？担任が、〇〇先生だったら、きっとこうはならないはずって思う一方で、ああ、きっと私は、ハズレのクラスだったんだって子供たちを責めたくなる時があります。

先輩の先生方は、『学級経営が大事だって』言いますが、私が日々困っているのは、明日の国語や算数をどうしようかなってことです。大体、学級経営が大事だって言っているのに、『教師は授業で勝負』とか言われます。

そもそも学級経営って何ですか？大学でも勉強したことがありません。」

何人かの若手の先生方の声をまとめて構成していますが、けっこうな割合でこうした声を聞きます。学級経営がよくわからないにもかかわらず、大事だって言われることに戸惑いを覚えるようです。

学級経営に悩んでいるのは若手の先生方だけではなくではありません。私の講座を受講後、ベテランの先生方から以下のような感想をいただきました。「私は今年で教員20年目になります。先生がお話されていたように、年々いわゆる大変なクラスを任されることが多く、しかも『できて当たり前』を求められるような気がしています。」、また、「『管理しやすいクラス＝良いクラス』ではないという言葉がとても心に残りました。規律のあるクラスにしようとしてつい厳しく接してしまうことが多かったように思います。また、学級経営の問題を1人でどうにかしようとしたり、荒れて

いる学級を他人事と思うのではなく、お互いにカバーし合えるような教員同士の関係づくりもしていきたいです。」、これらのコメントから、学級経営という営みに対する次のような問題が示唆されます。

年齢を重ねるほどに指導の難しいクラスを任される確率は高まるにもかかわらず、組織体制で授業研究はなされますが、学級経営の研究はほとんどなされず、自助努力に任せられます。

学級経営の実力はついていないのに、ハードルは高くなる一方です。学級経営をもともと知らないのに、学級経営を学ぼうにも学ぶ場がそう多くあるわけではありません。我流に我流を重ね、誤った指導法を正しいと信じ間違いを繰り返し、ある時、子供や保護者からダメ出しをされて、周囲に相談をすることもできず心が折れる、といった状況です。

私には不思議でならないのです。これだけ教員の成り手不足、人材確保の必要性が叫ばれている状況で、なぜ、教員のキャリアを守るための研修をシステム化しないのでしょうか。授業を失敗して休職したり、辞職したりする教員はほとんどいませんが、子供や保護者とうまくいけなくなると、そうした選択をせざるを得なくなる教員は少なくないのです。

校内に複数の機能低下した教室があり、それに疲弊し、いつ休もうかという状態の教員が校内にいるにもかかわらず、ニーズから遠いところばかりの研修を積み重ねている理由がよくわかりません。私もかつて小学校の教師でしたから、授業研究に意味がないと言っているわけではありません。公教育ですから、公の目標に資する必要性は認識しているつもりです。しかし、今や教師を取り巻く状況は変わったのです。そして、学級担任は誰でもできる仕事ではなくなったのです。

学級担任にはとても高度な専門性が求められます。教育愛や熱意、使命感に基づく基本的・人間的資質はじめ、児童・生徒の指導に直接関わる実践的資質といった教師としての基本的な資質・能力が求められます。また、経営にかかる能力も求められます。適切な目標と評価規準を設定し、そこに向かって子供とコミュニケーションをとりながらモチベーションを高め、子供同士を組織し、目標達成を通して、一人一人の成長を引き出す力です。全体指導ができる一方で、特別支援教育に関する専門性、個別の指導計画や教育支援計画の作成・活用能力など、個別指導の能力も欠かせません。

子供だけでなく、保護者、外部機関はもちろんですが、管理職や同僚とつながり、ネットワークを形成し、他者と協力的関係を築く力が求められます。チーム学校の実現には、「良質な組織人」が一定数以上必要となります。また、世の中の変化に応じて求められる力は随時変化します。常に学び続け、自分の専門性を高めるアップデート力はますます大事になってくるでしょう。

最早^{もはや}、授業力だけでは対応できないことは明らかです。こうしたことは誰もがわかっているにもかかわらず、それだけの力をつける仕組みが全く追いついていないのではないのでしょうか。

3 学級経営の基本型

学級担任に求められる力の中心に学級経営があることは自明のことですが、その肝心な学級経営という営みが、学習指導要領において、説明はなされていても定義がなされておらず、今一つはっきりしないのが学級担任のやりづらさになっています。

学級経営は、それぞれの実践家によって捉

え方が異なり、授業成立のための条件整備だと捉える人もいれば、人格形成の機会であると捉える人もいて、なかなか議論がかみ合わなかったりしています。学級経営は学問として確立しておらず、研究が立ち遅れている領域のひとつです。大学の教員養成でも必修科目として設定されていないため、現職の先生方もよくわからないという方が多いわけです。

こうした状況で白松（2017）の整理は、学級経営を捉えるフレームとしてとても重要な示唆を与えてくれます^{※1}。白松は、これまでの学級経営の議論に、生徒指導の視点を加味して、学級経営を3つの営みとして捉えました。学級経営は3層構造となっていて、基盤となるのは「必然的領域」と呼ばれる一人一人の人権を尊重する営みです。どの学級もどの教師であろうとも、ここは保障されるという意味で、必然的領域と呼ばれます。つまり、学級という場所は、子供一人一人の人権が守られ、あたたかみのある場所であることが必須条件です。ここでは学級担任の受容的なかわりが求められますが、他者を傷つけるような言動には毅然とした姿勢で介入的な指導も必要となります。

その上層に来るのが、「計画的領域」と呼ばれる、子供の自律のためにできることを増やすための指導が行われる部分です。学習や学級生活に必要な手順やルールが指導され習慣化が目指されます。主体的・対話的で深い学びの実現を目指すのであれば、話し合いの仕方や、互いのかかわり方などの指導も含まれます。生活歴によって必要なものや身に付けるまでの時間は異なるでしょうが、子供にとっては新しい価値や態度やスキルを学ぶこととなります。このときに、教えずして叱るだけの指導は論外として、丁寧なかかわりが求められます。必要な行為の意味を伝え（イ

ンストラクション）、まず教師自らやって見せ（モデリング）、そして子供たちに試行錯誤の機会を設け（リハーサル）、その遂行状況を見取って、できているところを伝えたり、どうやったら達成できるかを助言したり（フィードバック）します。計画的領域では、秩序の形成がポイントとなります。

児童生徒が安心して学ぶためには、秩序の中で一貫性がある生活環境が必要です。挨拶指導や姿勢指導や給食指導などすべて大事ですが、今一部現場では、過剰な指導が見られることがあります。その指導は児童生徒の将来に資するものなのでしょうか。教室は安心できる場所であるべきです。指導する内容も大事ですが、同時に何のためにどのように指導するかという検討は常にしていきたいものです。計画的領域の指導がうまく機能していけば、指導内容そのものは減っていくことでしょう。

最後の領域は、「偶発的領域」と呼ばれる問題解決や文化創造がなされる部分です。児童生徒の主体性を育てようと思ったらこの領域がとても大事です。ここは学級経営のゴールとも言えるべき営みです。子供たちで楽しいことを計画したり、学級をよりよくするために問題解決をしたりしながら、学級に良質な文化を形成するのです。

学級担任がその職責を全うするには、必要な専門性を育てる必要があります。まずはこうした学級経営の基本型を共有し、教師が安心して職務を遂行できるようにすることが、今いる人材を守り、そして、魅力的な学校現場を創っていくことにつながるのではないのでしょうか。

※1 白松賢『学級経営の教科書』東洋館出版、2017、pp1-32

好ましい人間関係を育む学級づくりについて ～「学級づくりガイドブック」より～

県総合教育センターカリキュラム開発部研究開発班

1 「学級づくりガイドブック」について

カリキュラム開発部研究開発班では、各教科・学級経営等に関する基礎的・実践的な調査研究や、社会の変化や本県の実践的な調査研究を行っている。



調査研究の成果物とし 【ガイドブック表紙】

て「授業づくりガイドブック」や「学級づくりガイドブック」等が県総合教育センターホームページ上にWebアップしている。

【目次】	
I	はじめに（学級づくり理論）
II	学級づくりの進め方
III	学級開き
IV	教師と児童生徒の信頼関係
V	児童生徒同士の人間関係
VI	主体的に活動できる学級
VII	同僚・保護者との関係づくり
VIII	資料

【学級づくりガイドブックの目次】

本稿では「学級づくりガイドブック（令和6年3月改訂）」を紹介する。ガイドブックは、先生方の日々の学級づくりに役立つ資料となっているので、是非御活用いただきたい。

2 見直されている「学級づくり」の重要性

見直されている「学級づくりの重要性」

学習や生活の基盤として教師と児童（生徒）との信頼関係及び児童（生徒）相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級（ホームルーム）経営の充実を図ること。

【小・中】学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編
高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編

【各校種の学習指導要領より】

これまで、学習指導要領において学級づくりの重要性について記載があったのは小学校のみであった。現行の学習指導要領から、中学校・高等学校でも学級・ホームルームづくりの重要性について言及された。

このことから「児童生徒の学習や生活における学校や学級の重要性」が改めて捉え直されていることが分かる。

3 学級に求められる「好ましい人間関係」

(1)教師と児童生徒の「信頼」関係

教師と児童生徒の人間関係づくりのキーワードは「信頼」である。

教師と児童生徒との人間関係は学級内の人間関係の基盤となる。教師は児童生徒の思いに気づき、それを認め、受容する過程を通して、少しずつ信頼関係が築かれていく。

その積み重ねの上に、学級全体に「信頼」をベースとした人間関係づくりが進んでいくのである。

(2)児童生徒同士の「認め合う」関係

児童生徒同士の人間関係づくりのキーワードは「認め合い」である。

児童生徒にとって、日々の生活で関心が高いのは児童生徒同士の人間関係であろう。教師は日々の指導を通して、児童生徒同士が互いの思いに気づき、それを理解し、受け入れようとする「認め合い」ができるようにすることが求められる。

その積み重ねの上に、児童生徒同士が互いの思いや良さ・違い等をありのまま認め合えるような、「認め合い」をベースとした人間関係づくりが進んでいくのである。



4 好ましい人間関係を育む学級づくりのために

教師と児童生徒・児童生徒同士の人間関係づくりのための考え方や手立て等について、学級づくりガイドブック（令和6年3月改訂）を基に紹介する。

(1) 教師と児童生徒の人間関係づくり

① 教師としてのふるまい

言葉遣い

- 「～です」「～さん」などの丁寧な言葉遣いをします。
- 時と場に応じた適切な言葉遣いや声量に気を付けます。

身だしなみ、身の回りを整える

- 清潔感のある服装、髪型、身だしなみを心がけます。
- 適や目的に合わせて、服装を心掛けます。
- 机を整理、身のまわりの整理整頓に気を配ります。

時間を守る

- 授業では、はじめと、終わりのチャイムを、しっかりと守ります。

あいさつをする

- 誰に対しても、積極的に、さわやかなあいさつをします。

分かりやすく指示する(ワンセンテンス・ワンメッセージ)

- 指示は、短く簡潔に伝えます。一文で一つの指示を出すように心がけます。
- 複数の指示をするときは、「まだ」「次に」や「一つ目は…」「二つ目は…」など、順序立てて伝えます。

【学級づくりガイドブック】より】

児童生徒に身に付けてほしいふるまいや行動は、まず教師自身が率先してやって見せ、良い手本となることが求められる。良い手本を示し続けることで、少しずつ信頼関係が築かれ、児童生徒との人間関係がより良いものになることが期待される。

② 児童生徒理解

「児童生徒理解」の重要性

学級経営を行う上で、最も重要なことは学級の児童（生徒）一人一人の実態を把握すること、すなわち確かな児童（生徒）理解である。※（ ）は中学校

【小・中】学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編

ホームルーム経営を行う上で最も重要なことはホームルームの生徒一人一人の実態を把握すること、すなわち確かな生徒理解である。

高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編

【カリキュラム開発部研究開発班実施研修資料より】

信頼関係の第一歩は相手のことを理解することである。そのためには、日頃の人間的な触れ合いに基づくきめ細かい観察や、児童生徒への共感的理解が求められる。

③ 自己開示

自己開示とは自分を知ってもらうことで

ある。その中には自分の弱い部分も含まれるので、信頼できる相手でないと打ち明けられない傾向がある。相手からすると「信頼してくれているから、話をしてくれた」と感じるため、自己開示された相手は自分も自己開示しやすくなり、人間関係が深まることが期待できる。

④ 「Iメッセージ」

学校生活において認めたり励ましたりする際の伝え方に「Iメッセージ」がある。

【「Youメッセージ」と「Iメッセージ」の例】

- ◇ 「Youメッセージ」
「なぜ考えて行動できないんですか！ これでは、時間の無駄です！」
- ◇ 「Iメッセージ」
「みなさんが考えて行動してくれると、時間を効率的に使うことができ、
[相手の行動] [その影響]
私はうれしいんだけどな。」
[自分の気持ち]

【学級づくりガイドブック】より】

「Iメッセージ」は、「私（I）」を主語にして「相手の行動」「その影響」「自分の気持ち」で構成されている話し方である。「私」を主語にしているため、相手に配慮しながら、自分の主張を伝えることができる。そのため、相手にとっても受け入れやすく信頼関係が成立しやすいといわれている。

⑤ 「コーチング」

「コーチング」とは、目標実現・問題解決のために、自発性を促し、行動を引き出すコミュニケーションである。一方、「ティーチング」とは主に答えを与えるものであるため、その答え以上のものが生まれないことが懸念される。

コーチングは児童生徒の可能性を信じて、自分で自分の中から答えを引き出すことができるようにサポートする。その結果、自分ができるような方法を、自分で考えるようになる。それがうまくいったときには、「自分もやればできる」という自己効力感をもつことが期待できる。

(2) 児童生徒同士の人間関係づくり

① 学級の状況を把握する

児童生徒同士の人間関係を育むために、その学級集団の状況を理解することが必要

である。児童生徒の関係性は日によって変わる。「年度初めは仲が良かったから、今もきっと仲が良いだろう」と単純に捉えるのではなく、休み時間や登下校、授業の中でどのようなつながりをもっているか、常に現状を捉え直すことが大切である。

②「授業」を大切に

授業を通した人間関係づくり

- ☑ 授業に **ペア・グループ活動** を積極的に取り入れる
＜関わり合い・認め合い・協力・協働する学習活動＞
- ☑ 教師の声かけ、**児童生徒同士のコミュニケーション**

「聞き手の相づち」 まずは「良い聞き手」を育てましょう

・おおー ・いいね ・なるほど
・うんうん ・そうだね など



【カリキュラム開発部研究開発班実施研修資料より】

児童生徒同士の人間関係を育むために、年間1000時間程行われる授業の時間を欠かすことはできないだろう。

授業の中で、児童生徒同士が、安心して自己表現できる雰囲気づくりが大切である。そのために、ペアやグループでの話し合い活動は良い機会である。その際に、まずは良い聞き手を育てることから始めるとよい。良い聞き手が育つことが、安心して考えや思いを話すことの第一歩となる。その時に、誰もが話しやすい雰囲気づくりのために「聞き手の相づち」等と称して話し合い活動の中で活用するようにしている学級もある。掲示したり、日々活用したりして、習慣のようになるとよいだろう。

③「行事」は絶好のチャンス

行事は、児童生徒一人一人を育て、人間関係を育む絶好のチャンスである。

一つの目標や目的に向かってみんなで協力をしたり、時には葛藤したりする体験は、自分



【「学級づくりガイドブック」より】

の意見を主張するばかりではなく、相手を尊重したり、折り合いをつけたりすることを通して、人間関係を築く力を育む。

その際、教師は一つ一つの行事を通して児童生徒に身に付けさせたい資質・能力を明確にし、児童生徒が主体的に取り組めるよう支援することが必要である。

④「アサーション」

「アサーション」とは「自他尊重の自己表現」という意味である。このことにより自分の意見や気持ちをきちんと「伝える」と同時に、相手の話も十分「聴く」ことにつながるため、互いを尊重する人間関係を育むために有効である。

自分のことを伝えると同時に、相手のことも聴く「アサーション」を身に付けられるようにするためには丁寧な指導が必要だが、指導の手がかりとして「デスク」という考え方がある。興味のある方は、参考文献を参照いただきたい。

「DESC(デスク)」:自分も相手も大切にする表現の手がかり

D 客観的事実の伝達 Describe	「話し始めて1時間経ちました」
E 自分の思いの表明 Express Explain	「予定があるので、今日はあと10分までここを出なければいけません。」
S 打開策の提案 Suggest Specify	「続きは後日にしませんか」
C 選択肢を示す Choose	「後日でよければ、明日日程調整の連絡をします。今日がよければ10分話せますが、どちらがよろしいですか。」

【カリキュラム開発部研究開発班実施研修資料より】

⑤自発的、自治的な活動の経験

自発的、自治的な活動とは、児童生徒が自ら課題を見出し、その解決方法や実施について合意形成を図り、互いに協力しながら目的を達成していくものである。

年度始めから取り組むことは難しいだろうが、「学校が楽しくなる朝の会・帰りの会」「係活動を『会社活動』にする」等、様々な先行実践がある。総合的な学習の時間（探究の時間）や特別活動、行事等を活用し、教科等横断的に取り組むことでより効果的な活動になるだろう。



自発的、自治的な活動では、ペアや班、全体での話し合いを通して合意形成を図ることが求められる。実践の過程において児童生徒の意見や考え、活動を尊重していくことはもちろんだが、教師がしっかりと関わり、適切に支援をしていく必要がある。



【「学級づくりガイドブック」より】

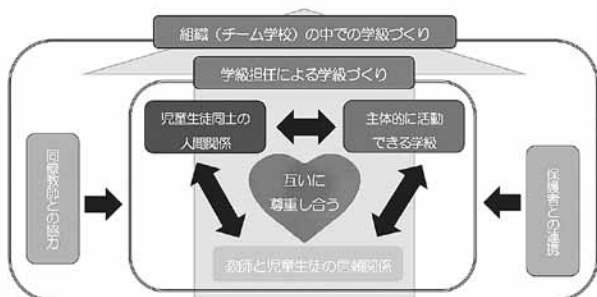
見や考え、活動を尊重していくことはもちろんだが、教師がしっかりと関わり、適切に支援をしていく必要がある。

5 おわりに

児童生徒の多様化に伴い、好ましい人間関係を育む学級づくりを進めることは容易ではないものになるだろう。

おわりにあたり、下記のことを伝えたい。

(1)学級づくりは学校ぐるみで！



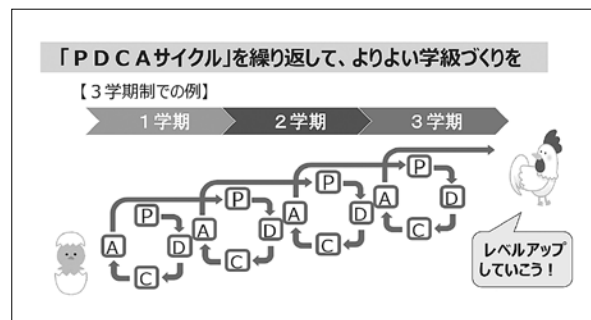
【「学級づくりガイドブック」より】

「学級担任による学級づくり」だが、「組織（チーム学校）の中での学級づくり」という認識も忘れてはいけない。学校の仕事で大切なことは、組織として対応することである。学級づくりには悩みを伴うことが多いが、それを一人で抱え込まず、管理職への報告や同僚教師の協力、保護者との連携等を通して、より良い学級づくりができるようになることを忘れないようにしたい。

(2)「PDCAサイクル」を繰り返して、より良い学級づくりを

学級に、好ましい人間関係づくりが進んで

いるかを振り返るために、定期的にPDCAサイクルを回すことができるとよい。そうすることで、現状を見つめ直したり、これまでの取組を見直したりすることができる。そして、これまでの取組を見直すことが、より良い学級づくりが進むよう意識することにつながっていく。



【カリキュラム開発部研究開発班実施研修資料より】

(3)スモールステップで粘り強く支援しよう

学級づくりは、長い道のりを一歩ずつ歩んでいくようなものである。そのため、焦らずに粘り強く、常にこれでいいのかを振り返りながら好ましい人間関係を育む学級づくりに取り組んでいただきたい。児童生徒にとって達成しやすい、身近な目標をスモールステップで与えながら、ゴールを目指していくとよい。その目標が達成できたら、新たな目標を与えそれに向かって活動する、という繰り返してゴールに近づくようにしていくとよいだろう。

(4)ガイドブックを御覧ください！

「学級づくりガイドブック」を、今後の好ましい人間関係を育む学級づくりにお役立ていただければ幸いである。

ガイドブックアクセス用二次元コード→



【参考文献】

- ・「学級づくりガイドブック（令和6年3月改訂）」千葉県総合教育センター 2024
- ・「三訂版 アサーション・トレーニング―さわやかな〈自己表現〉のために」（金子書房）平木典子 2021